単なる美術館ではなく、新しい芸術を創造し国際交流と経済支援を目指す。

世界に類のないのインド・フォークアートを集めた「ミティラー美術館」。日本でまだなじみの少ない文化だが、ヒンドゥー教や仏教にねざしたその作風には、日本人にも通じるものがある。展示だけではなく、インドの作家育成や日印交流にも力を注いでいるのも大きな特徴となっている。

米の粉を溶いた絵具で描かれる細密なミティラー画。

冬は4ｍもの雪に覆われる新潟県十日町市大池。その山道を登っていくと、古い小学校の校舎が見えてくる。そこが世界に類のないのインド・フォークアートを集めた美術館だとは誰も思わない。ここ『ミティラー美術館』は私設の美術館。インドのビハール州北東部を起源とするミティラー画が名称の由来だが、この美術館には絵画の他、巨大な象のオブジェや、女神像など多様な作品が展示されている。

もっともユニークな点は、実際に芸術家たちをインドから招いて、その場で作品を制作し、展示していることだ。彼らはミティラー美術館（元小学校）に寝起きし、数ヵ月かけて制作をする。自然に抱かれたこの美術館は、作品づくりには適した工房になる。

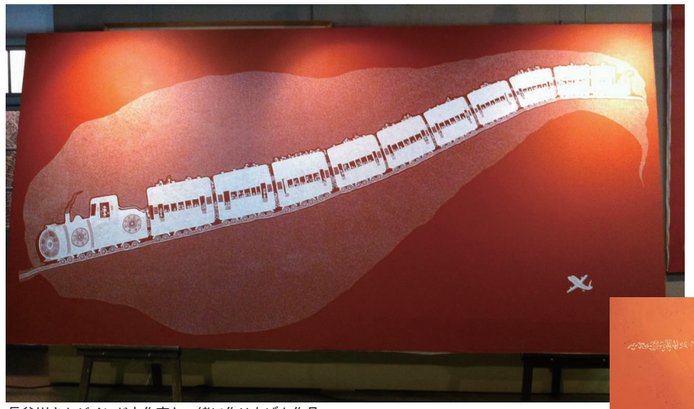
ミティラー画は、土壁に牛糞や赤土を塗ったうえに煤や米を溶いた絵の具で描く。使用するのは絵筆ではなく、楊枝のような竹を使って線をひく。そのため、ほんの少しずつ線をひいては絵具をつける、細かい作業である。だが、それゆえ完成した作品は、すきのない美しさを見せる。線はうっすらともりあがり、キャンバスから浮き上がっているようだ。

同美術館館長の長谷川時夫さんは

「インドの伝統的技術に加えて新しい前衛的な文化を創りたい」と語る。

もともと、長谷川さんは前衛音楽グループ「タージ・マハル旅行団」のメンバーだ。テナーサックス奏者として、黒人文化と白人文化が融合してできたジャズの世界に身を寄せながら、今度は日本やアジア発祥の文化から前衛的なものを創造していくことを夢見ていた。

その長谷川さんを捕まえたのが、このインドのフォークアートだった。一般的な作品の題材はヒンドゥー教に由来するものが多いが、この美術館の作品はそれだけでない。時には長谷川さんも口をはさみ、新しいイメージを作り上げていく。汽車が夜空を駆ける作品は、このようにして生まれた。


長谷川さんがインド人作家と一緒に作り上げた作品

細かい作業を繰り返し作品を完成させていく

ミティラー画で食べていける産業を作る。

長谷川さんが新しさにこだわるのは、文化的な問題からだけではない。ミティラー画に新たな価値を加え美術品として売れるようにしたいのだ。

「IT関連で発展のめざましいインドですが、多くの国民はまだまだ貧しいのです。伝統のミティラー画の技術を活かした新しい産業ができれば生活は楽になる」と長谷川さんは言う。

これまで日本に招いた作家は100人以上。世界的に有名なプロもいるが、中には技術はあっても、発想が素人に近い人もいる。そうした人を育てるのも長谷川さんの役目である。

「ナマステ・インディア 2010」のフォークアートのブース

17万人もの人を集め一大イベントとなった「ナマステ・インディア 2010」

担当者より

AJOSCの助成で「汽車」の絵が完成。

ミティラー美術館
館長
長谷川時夫さん

規制にとらわれず自由に見ていただき、各地で展示を行うという点では私設美術館の優位性はあるものの、資金の面では厳しさがあります。今回助成金をいただいたことで、また新たな作品を作り、作家が育ち、日印の文化交流を深めることができました。

こうして、ここは世界に類のないのインド・フォークアートを誇る美術館となった。地元のインドにもこれだけのコレクションはない。展示品のひとつの張りぼての象は、1988年に開催された「インド祭」で展示され、以後何度となく日本各地を巡っている。

長谷川さんの活動は一大イベント「ナマステ・インディア」として発展していった。メイン会場の東京代々木公園では、インドの舞踊、音楽、講演、インド映画、サリーの着付け体験、ヨガ、アーユルヴェーダ（インド式エステ）、メヘンディ（ヘナで手足に描くアート）、ブックフェア、グッツバザール、スパイス、紅茶コーナーなど豊かで多様なインド文化を丸ごと体験できるイベントが催される。18回目を数える2010年度では、17万人もの人を集めた。

これらの功績によって長谷川さんはインド政府から表彰を受け、高円宮ご夫妻をはじめ多くの人脈を持つ日印交流の第一人者になった。しかし、今日もまた十日町の山奥で近隣の人のためボランティアとして雪かきをし、インド人作家の面倒をみるという生活を続けている。

「この美術館の目玉展示品はなにか」と来館者に尋ねられると、長谷川さんは黙って空を指差す。

「月ですよ。そのために私はこの地に来たのです。どんな大家が作ったって、あの月ほどに美しいものは作れない」

野暮と粋の違いを知る館長に会いにいくのも、ミティラー美術館の楽しみかもしれない。